り、別の要求では有るが之れは一般の要求なれば、一つ水彩畫家は大に褌を締める時到來と云ふべし、終りにもう一つ述べ度きことあり、最早水彩畫の盛運今日の如く目出度きことなるに、之れが專門の團體の設け非らざるは恰も花見に來つて酒なきの感なくんば非らず、願くは帝國水彩畫協會とか水彩畫研究會とか云つたようなものを早々計畫組織し此道の研精に任ぜば如何、將に鬼に金棒閻魔に釘拔豆腐屋に喇叭なるべし、何卒早速同志諸君の御決行を切に希望する次第なり、以上東西々々、

僕の旅行

僕が旅行する時は先づ地圖を開いて川に沿ふた地を選ぶ、溪流に沿ふた處の風景は大概美である。さて目的地に達した時には其土地の人の話を多く聞くのである、土人の云ふ景色は殆と奇景であるが、其奇景のうちにも自分の理想に合つたやうな處も察しられるのである。

旅行の用意は輕裝を尙ふるは勿論である、履物は草鞋が一番よい、僕は綠の研究のため多く夏に旅行をするが一番困るのは毒虫である、曾て松明(タイマツ)を翳して行つたこともあつた、飛驒山中のある處では檜の皮を燻べて腰に下げてゐた、虻はうるさいものであるが馬か牛の歸るとき跡を通れば人間には着かぬといふことである、眼の前にクル〳〵廻る蚋には困る、其時は目を細くすると一時何處へか行く。西洋婦人のヴエールのやうなものを用ゐたらよからう。寫生中に飛んで來る虻は豫防の方法がない、螫された時にはハブ草をつけるとよい、ハブ草はエキスにして置くと携帶に便利で旅行中など入用なものである。其製法は、ハブ草の實を結ばぬうち葉と共に湯煮して、漉して其汁を湯煎にすると濃液となる、蝮蛇に咬まれた時もこの液をつけるとよい、蝮蛇の時は切り取るのが一番よいが。前後を固く縛つて毒血を出さぬと後に大害がある。蝮蛇の居る處には必ず萩があるから、萩のあゝ場處で注意すればよいとは土人の言である。昔しから紺がよいとの話であるが、餘りアテにはならぬ。

僕は溪流を見ると其源泉を探りたくなる、曾に探りたい許りでなく必ず探ることになつてゐる、新潟へ往つて信濃川を見ると、其水黃濁決してよい感じが起らぬが、其源流たる千曲川は天下の美を極めてゐる。

夏の旅行でも下着は毛織物がよい、輕い毛布が一つあれば山中に野宿することも出來る、又山中深林の中などで寫生でもする時は、濕氣のため病氣を起すことがあるから、出來るなら傍らで焚火をするとよい。(丸山晩霞氏談話の一節)

紺は蝮蛇を妨ぐことが出來るそうであるが、其紺は必ず新しく匂ひのあるものでなくてはならぬ。(編者)

＊　＊　＊　＊